29

有限会社 ミツミ

丸編み機の活用で、地場のタオル産業発展につなげる

工場内に並ぶ丸編み機

手がけるボディタオル

センサーで模様を読み取るカット機

事業内容 地元での生産にこだわる国産ボディタオル

「ミツミ」は平成9年に設立したタオル生産会社。タオル業界でも数少ない丸編み機を使って、浴用ボディタオルや洗顔用の泡立てネットなどを中心に手がけている。タオル生産が盛んな泉南地域に貢献する企業を目指しており、タオルの包装工程は地元の家庭内職で行い、中・高齢者の雇用促進を兼ね、地元のタオル産業に携わってきた経験豊富な職人の採用を積極的に行っている。製造から包装まですべて一貫して生産を行っている。

ノベルティー用を始め、さまざまなタオルを手がけており、５年ほど前からホテル用のアメニティ関連にも本格参入した。タオルの特徴としては生地がほかにはない二重構造のため空気を取り込みやすくなっている。そのため非常に泡立ちが良く、また肌触りもよいことから好評となり、現在では国内の有名ホテルや豪華寝台列車など採用され月２２万枚、スーパーなど量販店向けにも月１２万枚を販売する。最近は訪日外国人旅行者の増加でホテルの需要が伸び、現在は、増産のために人材採用や設備導入を積極化している。

補助事業 ふんわり感と多様な柄のタオルの生産

多彩な柄で、泡立ちが良くふんわり感のあるボディタオルを開発するため、製造工程で必要な機械を1台ずつ導入し、タオルの量産体制を整える。現在、所有する丸編み機の構造では糸を編み込むパターンの数に限りがある。秋山禎太郎社長は「会社の発展には、さまざまな種類の柄を作って販売する必要がある」と話す。また、編んだ後にふんわり感を出すためには熱処理が必要だが、既存の装置だと熱風の温度があまり上がらず、また、タオル全体に均等に熱風が当てにくいため、箇所によってふんわり感にムラが生じることがあるなど多くの問題があった。

そこで丸編み機、熱処理加工機、自動カット機を各1台導入する。これらの機械が稼働すれば、さまざまな問題を解決でき、品質的、デザイン的にも従来のタオルより優れた製品が作れる。さらに設備を増強することで、工場の生産能力がさらに向上する。

具体的成果 設備導入でタオルの価値が高まる

ボディタオルの生産に必要な機械を導入した結果、多様な柄や従来品よりふんわり感のあるタオルを作る体制が整った。また、一度に多くの種類の糸を使用できるようにも丸編み機を改良しているので、糸の組み合わせの幅が広がった。熱処理加工機は従来よりも幅広く温度調節ができるようになり、従来よりも高温の熱風をタオル糸に吹きつけることができ、ボリューム感のあるふんわりしたタオルに仕上がった。

タオルを切断するカット機はこれまで、構造上の問題により、生地の安定性を保つことが難しかった。その対応策として、新しいカット機に工夫を加え、生地にかかる負荷を軽減することができた。また、タオルを一定の長さで自動計測し切断していたのを、タオルの柄を読み取るセンサーが付いたカット機を導入したことで、柄に応じた自動切断も可能になった。熱処理加工機やカット機を入れたおかげで、この工程での生産性は導入以前より２倍に高められた。

今後の戦略 自社製品拡大で量販店向けに販路開拓へ

「ミツミ」ではボディタオルを月に３４万枚を生産し、日本の有名ホテルなどに採用されている。ただ、訪日外国人観光客の効果も一過性のブーム的なところがあり、ホテルでの需要が今後、増えるかは不透明だ。その課題を解決するには「自社製品を増やし、量販店向けに販売していきたい」と秋山社長は話す。その際に「国内で一貫して生産している自社の製品は強みになる」と力を込める。商品開発でさまざまなデザイン柄のタオルを開発し、量販店などに営業をかけていく。今後、量産が進むと人員や設備の増強が必要になる。

泉南地域は古くからタオルの生産が盛んで、生産知識に長けた人材が多いことから、彼らを採用し、即戦力として生産体制を強化していく。また「若手人材も確保して熟練からの技術継承を進め、地域経済の発展にも役立ちたい」と秋山社長は意気込む。一方、設備については、現在ある丸編み機を今後もさらに増やして生産力を高めたい考えで、数年以内に新工場の建設も検討する。これらに伴い、売り上げも前年比１０％増を目標に事業を積極化する方針だ。

有限会社 ミツミ

代表取締役　秋山 禎太郎

〒590-0505 大阪府泉南市信達大苗代152−1

TEL. 072−483−4153

FAX. 072−482−5634

資本金／3,000千円

従業員／27名

短納期　企画力　小ロットOK　オンリーワン技術　量産OK

タオルの生産で、泉南地域の産業の発展に貢献したい

代表取締役 秋山 禎太郎

丸編み機を使ってボディタオルなどを手がけています。独創的で機能的な、優位性の高い新商品を開発し、ボディタオル業界を牽引できるように奮闘しています。今後も顧客の目線に立ったものづくりを目指します。

取材を終えて

人一倍の努力とやさしさで、さらなる成長を

秋山社長はタオル生産に関する知識が一切ないにもかかわらず、果敢に起業した経歴を持つチャレンジャーだ。人一倍の努力をされ設立から19年で、ボディタオルを月３４万枚生産するまでに大きく成長した。そんな秋山社長も自分に対しては非常に厳しいそうだ。しかし、夜勤の社員のために夜食を取ってくれるような一面も従業員の方から聞くことができた。誰に対しても気配りができる秋山社長。今後も気配りを忘れず会社を発展させてほしい。